

平城宮東方官衙地区 SK19189 出土の薄板

—第440次

1 はじめに

本報告では、2008年度に行われた平城宮東方官衙地区の発掘調査（平城第440次）で検出された東西約11m南北約7mの土坑（SK19189）からまとまって出土した薄板について報告する。土坑の埋土は現在も土壤水洗中であり、これまでに770年代前半頃に廃棄された衛府にかかわる木簡や木製品が多数出土している（『紀要 2009』）。今回、新たに洗浄が完了した資料の中に薄板と製作途中の薄板、さらに多量の削片を見いだすことができたため、規格のある薄板の製作およびその製作方法の復元が見込まれた。そこで、これら出土遺物の資料化をおこなった。

2 資料の概要

今回報告する資料は、土坑内の1mメッシュの同一グリッド内から出土しており（図211）、同時に廃棄されたと考えられる一群である。

薄板 図212-1～4は薄板。1は表面に刃物による加工痕跡が残る。両端は切断されており、一端には斜めのケビキ線が数条残る。長88.1cm、最大幅1.9cm、厚0.3cm。板目材。2は表面に刃物による加工痕跡が残る。一端は切断されている。長80.3cm、幅1.2cm、厚0.2cm。板目材。1と2は接合し、長さ約1.68mに復元できる。3は両端折損で、表面に刃物による加工痕跡が残る。板目材。残存長45.4cm、幅1.4cm、厚0.2cm。板目材。4は両端折損で、表面に刃物による加工痕が残る。残存長39.1cm、幅1.4cm、厚0.3cm。板目材。

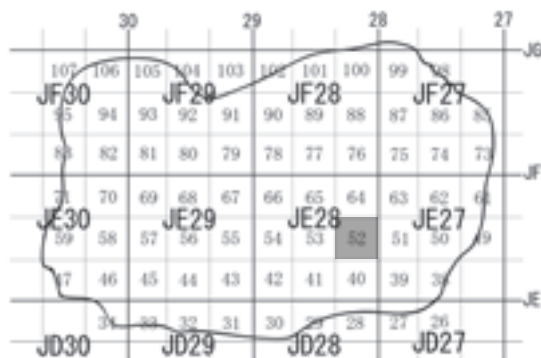


図211 SK19189の1mメッシュと薄板出土地点

未成品 図212-5は一端は角柱状でもう一端は平たい薄板状を呈する。角柱状に割り裂かれた材の四面を削り出し、薄板を作り出す途中段階のもの。残存長71.0cm、角柱状の部分で幅1.4cm、厚1.2cm、薄板状の部分で幅1.3cm、厚0.3cm。板目材。

削片 薄板および未成品と同一グリッドからは多量¹⁾の削片が出土した（図213）。図214は多量の削片の一部である。削片の中には稜線を持ち断面が三角形を呈するものと、断面が扁平のものがある。両者の差は角棒状の材を削り取る際のものや、面を平滑に調整する際のものと考えられる。削片には板目や柾目のものが混在している。図213-1、2は長さが約18cmで、一回の削る動作で18cm以上を削り取ることができた。削片の最大幅は、0.5～0.6cmに収まり、これは使用していた工具（刀子と考えられる）の刃の入り方によるものとみられる。

3 資料の位置付け

土坑内から出土した薄板、未成品、削片の組み合わせは板目の薄板が、宮内を含む周辺で製作されたことを示す。薄板は、図212-1と2の接合資料から、長さ1.68m以上のものが復元でき、未成品と多量の削片から、薄板は割り裂いた角柱状の棒材を削り出して作られたことがわかる。幅、厚みともに近似した薄板が作られているが、用途は不明である。図212-1は両端が切断されており、この長さ（あるいは以下）での使用を想定し、作られたものか。

本資料が出土した土坑からは、薄板製作の類例として檜扇の完成品と未成品が出土しており、宮内での檜扇製作が示唆されている。出土した檜扇の未成品は、4mm以上の厚みの板目板を成形して、それを3枚に割り裂いて製作されている（『紀要 2010』pp64-65）。同じく板目の「薄板」を作り出しているものの「削り出し」と「割り裂き」とでは、その技法が異なる。

これらの薄板の製作技法がどのように選択されるかは定かではないが、板目で長い薄板を製作する際に「割り裂き」ではなく「削り出し」が選択される可能性がある。

なお、本報告にはJSPS科研費JP16K16951の成果の一部を利用している。

（浦 蓉子）

註

1) 出土した削屑を数量化して示すことは難しいが、遺物用コンテナ（内寸 543×340×70mm）に6箱分が出土している。



図212 薄板と加工途中の薄板 1 : 4

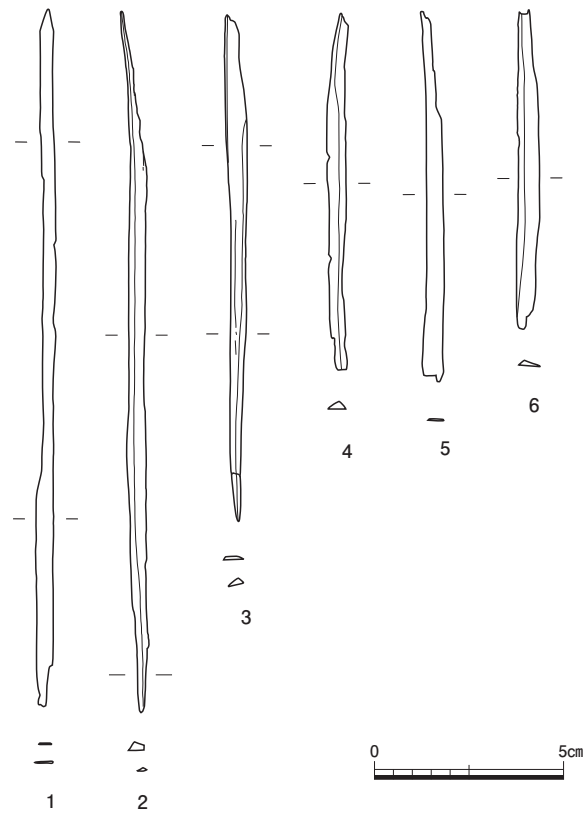


図213 削片 1 : 2



図214 薄板とともに出土した多量の削片